

「わらしべ長者」あらすじと内容のポイントを わかりやすく解説

「わらしべ長者（ちょうじゃ）」とは

『わらしべ長者』は、ふるくから つたわる昔話（おかしばなし）なんだ。

「わらしべ長者」の作者（さくしゃ）は？

『わらしべ長者』は、ひとびとの あいだで かたりつがれてきた おはなしで、だれが つくった おはなしなのかは わかっていないよ。

「わらしべ長者ちょうじゃ」あらすじ

むかしむかし、ある男はゆめの中で「さいしょにさわったものを、手てからはなさないようにしなさい。きっと、いいことがある」という声を聞きました。

男がさいしょにさわったのは一本のわらしべ。

わらしべに あぶをおすびつけてもって歩くと、そのわらしべを ほしいといわれて、みかんとこうかんします。

そのみかんは、きれいな ぬのとこうかんされ、

ぬのは馬にこうかんされ、

とうとう馬は大きなやしきとこうかんされました。

わらしべがみかんになり、みかんがぬのになり、ぬのが馬になり、馬がやしきになったのです。ひとびとは、男おとこのことを「わらしべちょうじゃ」とよぶようになりました。



「わらしべ長者」のお話の内容をかくにんしよう

「わらしべ長者」登場人物（とうじょうじんぶつ）

おとこ・・・ゆめの おつげを きいて、わらしべを もって いく

男の子とその母親（ははおや）・・・わらしべと みかんを こうかんして
ほしいと いう

女（おんな）の人・・・のどが かわいて、みかんと ぬのを こうかん
する

馬ともちぬし・・・うごかなくなった馬と、ぬのを こうかんする

やしきのしゅじん・・・馬と やしきを こうかんしてほしいと いう

男はどうして「わらしべ」をもっていたの？

「わらしべ」とは、稲いね（おこめがとれる草くさ）の、わら（くきを
ほしたもの）の しんのこと。

どうして 男は、そんなものを もっていたのかな。

男は、ある日 ゆめの中で「さいしょにさわったものを、手からはなさない
ようにしなさい。きっと、いいことがありますよ。」という こえを き
いたよね。



そして、そとでころんでしまったときに、たまたま手でさわったのがわらしべだったんだよね。



だから、男はさいしょにさわった「わらしべ」を、はなさないようにもっていたんだね。

どうして「わらしべ」が「みかん」になったの？

男は、つかまえたあぶ（ハエのなかま）をわらしべにおすんでいたね。それを見た男の子が、あぶのついたわらしべをほしがったんだよね。

あぶ(ハエのなかま)



わらしべに むすばれた あぶが とぶと、まるで ふうせんのように おもしろいよね。男の子が ほしがるのも わかるね。

男の子が あぶのついた わらしべを ほしがったので、男の子の おかあさんが もっていた みかんと わらしべを こうかんしてほしいと おねがいたんだね。

どうして「みかん」が「ぬの」になったの？

こんどは、女の人が すわりこんでいたね。

女の方は、のどが かわいて、あるけなくなっていたね。

みかんには あまいしるが たくさんはっているよね。だから、男は女の人に みかんを あげたんだね。

そのおれいに、女の方は、男に ぬのを あげたんだね。

どうして「ぬの」が「馬」になったの？

こんどは、馬が たおれていたね。

馬は げんきが なくなって、うごかなくなってしまっていたね。

なので、馬の もちぬしは、馬を すてていこうと していたよね。

馬が すてられてしまうのは かわいそうだと 男は おもって、もっていた ぬのを もちぬしに わたして、かわりに 馬を もらうことに したんだね。



どうして「馬」が「やしき」になったの？

男が せわをすると馬は げんきになったね。そして馬に のって 大きな やしきの まえを とおりかかると、やしきの しゅじんが 馬を ほしがったんだよね。

なぜなら、やしきの しゅじんは、これから たびに でののに、馬が ひつようだったからだね。

どうしても 馬が ほしいので、かわりに 「じぶんが もどらなかつたら、やしきを 男に あげる」という やくそくを していったね。

そして、やしきの しゅじんが もどってこなかったの、やくそくどおり やしきは 男のものに なったんだね。

どうして「わらしべ長者」とよばれるようになったの？

「長者」は「おかねもち」という いみだったね。

男は、さいしょは わらしべを もっているだけだったのに、わらしべが みかんになって、みかんが ぬのになって、ぬのが 馬になって、とうとう馬が やしきになって、男は おかねもちに なったよね。

だから、ひとびとは「わらしべ」で「おかねもち」になった 男のことを「わらしべ長者」と よんだんだね。



「わらしべ長者」にでてくることばの意味調しらべ

『わらしべ長者』に どうしようする ことばの いみを かくにんしよう。

ここに かかれているのは『わらしべ長者』で つかわれている いみなので ちゅういしてね。

ことば	いみ
うっかり	ぼんやりして ちゅういが たりない ようす。
わらしべ	^{いね} 稲の わらの しん。
あぶ	ハエの なかまの こんちゅう。
おいはらう	じゃまな ものを おって、そこに いないように させること。
こうかん	とりかえること。いれかえること。
うん	しあわせにしたり、ふしあわせにしたりする 人では どうすることも できない 力。
うなずく	「わかった」と、くびを たてに ふること。
うるおす	ちょうどよい 水ぶんを あたえること。
道ばた	みちの わき。どうろの はしの あたり。
もちぬし	それを もっている ひとのこと。
しかたない	どうしようもないこと。ほかに ほうぼうが ないこと。
ゆずる	じぶんの ものを ほかの ひとに あたえること。
たちさる	たつて そこから なくなること。
せわ	めんどうを みること。
とりもどす	とつて もとの じょうたいに もどすこと。
そのうち	すこし たつと。
やしき	りっぱな ひろい いえのこと。
しゅじん	いえの もちぬしのこと。
ひつよう	なくては ならないこと。
やがて	まもなく。そのうちに。
ちょうじゃ	おかねもちのこと。



「わらしべ長者」にでてくるものの順番（じゅんばん）

『わらしべ長者』では たくさんの ものが でてきて、こうかんされていくよね。

なにが どんな じゅんばんで どうしようしたのか、せいりしておこう。

- 1 わらしべ
- 2 あぶ
- 3 みかん
- 4 ぬの
- 5 馬
- 6 やしき

「わらしべ長者」の教訓（きょうくん）は？

「教訓」とは、なにかを するとき さんこうになるような ことを おしえること。

つまり、「わらしべ長者」の お話が、よんだひとに どんなことを つたえたいかと いうことだね。

『わらしべ長者』の しゅじんこうの 男は、ゆめで言われたとおりに わらしべを もっていたから おかねもちに なれたよね。

また、こまっている人の おねがいを きいてあげるなど、すなおで やさしい 男だから しあわせに なれたんだね。

だから、『わらしべ長者』の お話は、「すなおで やさしく、まっすぐに 生きること しあわせに なれる」と つたえたいと かんがえることが できるよ。



また、男にとっては なんてことのない わらしべでも、男の子にとっては ほしいものだったり したよね。

つまり、「それぞれの人にとって たいせつなものは ちがう」、「じぶんにとって いらぬものでも、ほかの人にとっては たいせつなものかもしれない」ということも つたわるね。

「わらしべ長者」の原文（げんぶん）とは

「原文」とは、おはなしが つくられたときそのままの 文しょうのこと。

むかしのことばで かかれていますということだね。

『わらしべ長者』は、日本に ふるくからつたわる おはなしを あつめた『宇治拾遺物語（うじしゅういものがたり）』という ものがたりしゅうに でてくるよ。

宇治拾遺物語に かかれています『わらしべ長者』の そのままの 文しょうを しょうかいするよ。

今は昔父母主もなく妻も子もなくてただ一人ある青侍ありけり
すべき方もなかりければ観音助け給へとて長谷に参りて御前に俯伏し伏して
申しけるやう

この世にかくてあるべくはやがてこの御前にて干死に死なんもしまた自らなる
便もあるべくばその由の夢を見ざらん限りは出でなましとて俯伏し伏したり
けるを寺の僧見て

こはいかなる者のかくては候ふぞ物食ふところも見えず

かく俯伏し伏したれば寺の為けがらひ出で来て大事になりなん

誰を師にはしたるぞ何処にてか物は食ふなど問ひければかく便なき者は師も
いかでか侍らん



物給はる所もなく哀れと申す人もなければ仏述給はん物を食べて仏を師と頼み奉りて候ふなりと答へければ寺の僧ども集まりてこの事いと不便のことなり

寺の為に悪しかりなん観音をかこち申す人にこそあんなれ
これ集まりて養ひて候はせんとて代る代る物を食はせければ持て来る物を食ひつつ御前を立ち去らず候けるほどに三七日になりにけり
三七日果てて明けんとする夜の夢に御帳より人の出でて
この男前世の罪の報いをば知らで観音をかこち申してかくて候ふこといと怪しき事なり

さはあれども申す事のいとほしければ聊の事計らひ給はりぬ
先づ速に罷り出でよ罷り出でんに何もあれ手に当らん物を取りて捨てずして持ちたれ

疾く疾く罷り出でよと追はると見て匍ひ起きて約束の僧の許行きて物打食ひて罷り出でけるほどに大門にて蹴躓きて俯伏しに倒れにけり
起きあがりたるにあるにもあらず手に握られたる物を見れば藁すべと云ふ物ただ一筋握られたり

仏述給ふ物にてあるにやあらんといとはかなく思へども仏の計らせ給ふやうあらんと思ひてこれを手弄りにしつつ行くほどに
蛇一つふめきて顔のめぐりにあるを煩ければ木の枝を折りて払ひ捨つれどもなほただ同じやうに煩さくふめきければ捕へて腰をこの藁すぢにて引き括りて杖の先につけて持たりければ腰を括られて外へはえ行かてふめき飛び廻りけるを

長谷に参りける女車の前の簾を打被きて居たる児のいと美しげなるがあの男の持ちたる物は何ぞかれ乞ひて我に給べと馬に乗りて供にある侍に云ひければ

その侍その持ちたる物若君の召すに参らせよと云ひければ仏述給びたる物に候へどかく仰せごと候へば参らせて候はんとて取らせたりけば
この男いと哀れなる男なり若君の召す物を安く参らせたる事と云ひて大柑子をこれ喉乾くらんたべよとて三いと香ばしき陸奥国紙に包みて取らせたりければ侍取り伝へて取らす

藁一すぢが大柑子三つになりぬる事と思ひて木の枝に結び付けて肩に打掛けて行くほどに



故ある人の忍びて参るよと見えて侍など数多具して徒より参る女房の歩み困
じてただ立てりに立てり居たるが

喉の乾けば水飲ませよとて消え入る様にすれば供の人々手惑ひをして近く水
やあると走り騒ぎ求むれど水もなしこはいかがせんずる御旅籠馬馬にやもし
あると問へば遥に後れたりとて見えぬ

ほとほとしきさまに見ゆれば誠に騒ぎ惑ひてしあつかふを見て

喉乾きて騒ぐ人よと見ればやはら歩み寄りたるにここなる男こそ水のあり
所は知りたるらめ

この辺近く水の清き所やあると問ひければこの四五町が内には清き水候はじ
いかなる事の候ふにかと問ひければ

歩み困ぜさせ給ひて御喉の乾かせ給ひて水欲しながらせ給ふに水のなきが大事
なれば尋ねぬるぞと云ひければ

不便に候ふ御事かな水の所は遠くて汲みて参らば程へ候ひなんこれはいかが
とて包みたる柑子を三つながら取らせたりければ喜び騒ぎて食はせたりけれ
ばそれを食ひて漸々目を見あけてこはいかなりつる事ぞと云ふ

御喉乾かせ給ひて水飲ませよと仰せられつるままに御とのごもり入らせ給ひ
つれば水求め候ひつれども清き水も候はざりつるにここに候ふ男の思ひがけ
ぬにその心を得てこの柑子を三つ奉りたりつれば参らせたるなりと云ふにこ
の女我はさは喉乾きて絶え入りたりけるにこそありけれ

水飲ませよと云ひつるばかりは覚ゆれどその後の事は露覚えぬこの柑子えざ
らましかばこの野中にて消え入りなまし嬉しかりける男かな

この男未だあるかと問へば

かしこに候と申すその男暫しあれと云へいみじからん事ありとも絶え入はて
なば甲斐なくてこそやみなまし

男の嬉しと思ふばかりの事はかかる旅にてはいかがせんずるぞ食物は持ちて
来たるか食はせてやれと云へばあの男暫し候へ御旅籠馬など参りたらんに物
など食ひて罷れと云へば承りぬとて居たるほどに旅籠馬皮籠馬など来着きた
り

何どかく遥に後れては参るぞ御旅籠馬などは常に先立つこそ善けれ急の事な
どもあるにかく後るるはよき事かはなど云ひてやがて幔引き畳など敷きて水
遠かなれど困ぜさせ給ひたれば食し物は此処にて参らすべきなりとて夫ど
も遣りなどして水汲ませ食物し出だしたればこの男に清げにして食はせたり



物を食ふ食ふありつる柑子何にか成らんずらん観音計らはせ給ふ事なればよも空しくてはやまじと思ひ居たるほどに白く善き布を三むら取り出でてこれあの男に取らせよこの柑子の喜びは言ひ尽くすべき方もなけれどもかかる旅の道にては嬉しと思ふばかりの事はいかがせん

これはただ志の始めを見するなり京のおはしまし所はそこそこになん必ず参れこの柑子の喜びをばせんずるぞと云ひて布三むら取らせたれば喜びて布を取りて藁筋すぢ筋が布三足になりぬる事と思ひて脇に挟みて罷るほどにその日は暮れにけり

道づらなる人の家に留まりて明けぬれば鳥とともに起きて行くほどに日さし上がりて辰の時ばかりにえも云はず善き馬に乗りたる人この馬を愛しつつ道も行きやらずふるまはするほどに誠にえも云はぬ馬かなこれをぞ千貫かけなどは云ふにやあらんと見るほどにこの馬俄に倒れてただ死に死ぬれば主我にもあらぬ気色にて下りて立ち居たり手惑ひして従者どもも鞍おろしなどしていかがせんずると云へどもかひなく死に果てぬれば手を打ちあさましがり泣ぬばかりに思ひたれどすべき方なくて怪しの馬のあるに乗りぬ

かくて此所にありともすべきやうもなし我はいなんこれともかくもして引き隠せとて下衆男を一人留めていぬればこの男見てこの馬わが馬にならんとて死ぬるにこそあんめれ

藁一すぢ柑子三になりぬ柑子三つが布三むらになりたりこの布馬に成るべきなめりと思ひて歩み寄りてこの下衆男に云ふやうこはいかなりつる馬ぞと問ひければ陸奥国より得させ給へる馬なり万づの人の欲しがりて価も限らず買はんと申しつるをも惜しみて放ち給はずして今日かく死ぬればその価少分をも取らせ給はずなりぬ己も皮をだに剥がばやと思へど旅にてはいかがすべきと思ひてまもり立ちて侍るなりと云ひければその事なりいみじき御馬かなと見侍りつるにはかなくかく死ぬる事命あるものはあさましき事なり誠に旅にては皮剥ぎ給ひたりともえ乾し給ふまじ己はこの辺に侍れば皮剥ぎて遣ひ侍らん得させておはしねとてこの布を一むら取らせたれば男思はずなる所得したりと思ひて思ひぞ返すとや思ふらん布を取るままに見だにも返らず走り去ぬ

男よく遣り果てて後手かき洗ひて長谷の御方の向ひてこの馬生けて給はらんと念じ居たるほどに

この馬目を見上ぐるままに頭をもたげて起きんとしければやはら手を掛けて



起しぬ嬉しき事限りなしおくれて来る人もぞあるまたありつる男もぞ来るなど危く覚えければ

やうやう隠れの方に引き入れて時移るまで休息てもとのやうに心地もなりにければ人の許に引きもて行きてその布一むらして轡やあやしの鞍に替へて馬に乗りぬ

京ざまに上るほどに宇治辺にて日暮れにければその夜は人の許にとまりて今一むらの布して馬の草我が食物などに替へてその夜はとまりて翌朝いと疾く京ざまに上りければ九条わたりなる人の家に物へ往かんずるやうにて立ち騒ぐ所あり

この馬京に率て行きたらんに見知りたる人ありて盗みたるかなど云はれんも由なしやはらこれを売ればやと思ひてかやうの所に馬など用なる物ぞかして下り立ちて寄りて

もし馬などや買はせ給ふと問ひければ馬がなと思ひけるほどに

この馬を見ていかがせんと騒ぎて只今替り絹などはなきをこの鳥羽の田や米などには替へてんやと云ひければなかなか絹よりは第一の事なりと思ひて絹や銭などこそ用には侍れ己は旅なれば田ならば何にかはせんずと思ひ給ふれど馬の御用あるべくはただ仰せにこそ従はめと云へばこの馬に乗り心み馳せなどしてただ思ひつるさまなりと云ひてこの鳥羽の近き田三町稲少し米など取らせてやがてこの家を預けて己もし命ありて帰り上りたらばその時返し得させ給へ上らざらん限りはかくて居給へれもしまた命絶えてなくもなりなばやがてわが家にして居給へ子も侍らねばとかく申す人もよも侍らじと云ひて預けてやがて下りにければその家に入り居て得たりける

米稲など取り置きてただ一人なりけれど食物ありければ傍らその辺なりける下衆など出でて使はれなどしてただありつきに居つきにけり

二月ばかりの事なりければその得たりける田を半らは人に作らせ今半らは我が料に作らせたりけるが人の方のも善けれどもそれは世の常にて己が分とて作りたるは殊の外多く出で来たりければ稲多く刈り置きてそれより打始め風の吹き付くるやうに徳付きていみじき徳人にてぞありける

その家主人も音せずなりにければその家も我が物にして子孫など出で来て殊の外に栄えたりけるとか

